

出会い (7)

ダブルパンチ

奥村 一郎

「キリスト教を体で知るためには洗礼を受けなさい」という思いがけない言葉を与えられて、中川宋洲老師にいとまごいをしたものの、実際にどうしたらよいものか、すぐには分からなかった。しかし、カトリック教会での洗礼のためには、「公教要理」(現在では「カトリック要理」といわれる、問答様式にまとめられた神学の縮刷版)に基づいて勉強をする必要があることは知っていた。ところで、その本にもまた、残念ながら、わたしにはよい思い出がなかった。例の聖書研究会を始めた頃、わたしをカトリックに導こうとした熱心な老婦人から手渡されたのが、その「公教要理」であった。聖書の場合も、初端から讀いてしまったように、この本の場合も同じ。

まず緒言からして問題。．．。宗教は人の道を完うし、完全な幸福を得るために是非必要であります。しかし、どんな宗教でもよいというわけではなく、唯眞の宗教によってのみ、その目的を達することができます。そして、天主は御一体、真理は一つ、人の眞の道も一つでありますから、眞の宗教は唯一つあるのみであります。その上、天主に対する人の道は、人が自由に決めることではありませんから、眞の宗教は天主の啓示し給うたものでなければなりません。幸い天主は人々に眞の宗教をお示しになりました。

禅仏教に熱中していた当時の若い学生時代のわたしにとって、上記のような、キリスト教だけを「唯一の眞の宗教」であるという主張は全く受け入れられなかっただけでなく、その宗教的傲慢に堪え難い憤りを覚えた。このことは、拙稿「出会い」の今までの経過をご存じの方には十分推測していただけることと思う。

次に、第一課 人の目的：人は何のために、この世に生まれてきましたか。

人がこの世に生まれてきたのは、天主を知り、天主を愛し、天主に仕えて、ついに、天国の幸福を得るためであります。

この答えは、一瞬、わたしの心のなかに複雑な波紋をつくった。生まれること、そして生き

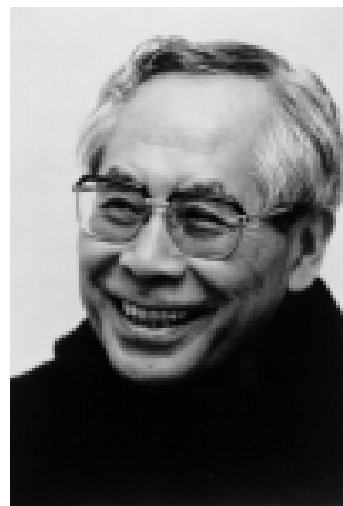
ること、愛すること。．．。まさに、人生の「大疑問」が、冒頭に取り上げられていることには、強い印象をうけ、共感を覚えた。だが、それに比して、答えの簡単さにあきれかえった。一生問いかけても答えのない、人生の最大の課題を、わずか、一行の答えで片付けられているのに愕然とした。宗教的大天才、釈尊にしても、その問いに六年にわたる瞑想を続けなければならなかった。達磨大師の「面壁九年」もしかり。

旧制一高時代に知った藤村操の有名な「巖頭之感」も忘れられない。当年わずか十七才の若さで人生とこの宇宙の神秘を問うことに命をかけた真剣な哲学青年の自死の物語は、今も向陵自治寮史に不滅の記録として残されている。

悠々たるかな天壤。遼々たるかな古今。五尺の小軀をもってこの大をはからんとす。ホレーショの哲学、ついに何等のオーソリティに値するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉、曰く、「不可解」。我この恨を懷いて煩悶終に死を決す。すでに、巖頭に立つにおよんで胸中何等の不安あるなし。初めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致するを。

日光華嚴の滝の傍らにあった桜の幹を削り、墨痕鮮やかに書き残された壮絶な人生の苦悶は、少なくともわたしと同世代の日本人なら、その心の奥深くに響いてくるものがあるのではなかろうか。

このような時代にあった当時のわたしにとって、「公教要理」の説明は、全く、実も花もない愚答でしかなかった。正しいとか、間違っているとかの次元ではない。誰にとっても、人生は考えれば考えるほど深い神秘であるはずなのに、余りにも簡単に整理してしまう要理の割り切り方が情けなかった。血も涙もない干からびた言葉。「正解であるとしても眞実ではない」。そこでは、知性の論理と心情の論理とがかみ合わない。「複雑な心の波紋」と言ったのはそのことである。長年にわたって悪戦苦闘した聖書の場合とは別の文化的違和感に由来する蹟きであった。まさに、カトリックにダブルパンチを喰わせた、否、逆に喰わされたともいうのであろうか。



奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

ともあれ、この二つの大疑問、「眞の宗教とは？」と、「人生とは？」という問いは、受洗後五十年になる今にいたるまで、形を変えてわたしの魂の奥深くに棲息している。現代神学ブームとなりつつある、「宗教対話」や、「福音と文化」という課題は、わたしにとって、キリスト教との衝撃的な出会いのうちにすでに端を發した永遠の課題であった。

子供要理教室：

例の反キリスト論を書き上げた頃は、高円寺の友人の家をでて大森の下宿に移っていた。中川宋洲老師をお訪ねした時も、そこから三島の龍澤寺に出かけた。それまで、頭ばかりで、気が狂ったかのようにキリストを追いつめていたのが、老師の一言で、突如、ひっくり返ってしまった。それから、また、しばらく呆然として二カ月ほど時がたつうちに、静かに心の傷口が癒され、キリストに激しく挑んだ自分の身の程知らずの知的傲慢を痛いほどに感じ始めた。

その頃ふと、どこからか、確かなひとつの聲が聞こえた：教会に聞け。その時、「教会」という言葉の意味がすぐに掘めなかった。はつきりとしているようで、何か広く漠然としていた。とにかく、地図をみると、下宿に近い大森教会があることが分かった。うろろうしていても仕方がないと、腹を決めて、紹介状もなく、見ず知らずのその教会を訪ねることにした。戦後三年目、司祭館といえるようなものではなく、米軍払い下げの「かまぼこ兵舎」。太い針金でしばったドアを叩くと、神父が出てこられて、自分の立ち話。「公教要理を教えてくださいのですが、．．。」というと、「うん、いいぞ。次の木曜日の朝、九時に来い」、「はい」と一言できる。

お知らせ：10月11日（日）NHK教育テレビ7:30AM「こころの時代」に奥村神父様出演され、祈りと生活についてお話しされる予定です。（編集部）

それが、数年前に帰天された恩師、「われらのおやじ」の名で知られた下山正義師であった。

ところで、その日、約束通り出かけていくと、数人の子供たちが部屋の中をかけまわって遊んでいる。九時。下山師が入ってこられる、子供たちはピンポン台を囲んでパタパタと腰掛ける。何が始まるのか分からないままに、私も彼等と一緒に並ぶ。まず短い祈り。それから、約二十分ぐらいの話で終わり。解散。急いで子供たちは飛び出していく。私は一人取り残されてガララとした部屋にしばらくひとりぼっち。狐につままれたように。それが最初のレッスンであった。行くところもなく、隣の建築中の聖堂に入って、一時間ほど祈るともなく、静かに思い巡らしていた。当て外れであったことはいうまでもない。しかし、なぜか、騙されたような気にもならず、憤懣も感じなかった。その時の話は全く子供向きの話。わたしには、なんの興味もなく、為にもならない事ばかりであったのは言うまでもない。ところが、奇妙なことに、その子供用の話を何回も繰り返し聞いているうちに、なにか、バック・ミュージックのように心地好くなり、そのあいだに、いくつも頭に浮かんでくる、神学の難問がブルドーザーでどんどん整理されていくように思われた。それから、子供要理教室が楽しくなってきた。それに、子供たちと遊ぶのも楽しかった。「幼子のようにならなければ天国に入れない」というキリストの福音的教育法であったのだろうか。とにかく「公教要理」の講義らしきものは、一度も教えられないままに二カ月ほどの時が流れた。自分で読み直したり、個人的に質問をして話し合ったりするうちに、いつの間にか頭と心とが整えられていった。

「^{まろし}^{すえ} 蠅の齋よ、回心せよ！」*と、下山師が後ろからわたしの肩を叩かれたのは、その頃であった。ところで当時は、受洗のためには、一応、筆記試験を通らねばならなかった。下山師の部屋の中で答案を書かされた。「第一問 神の存在を論証せよ」。調子に乗って、十数枚びっしり書いたことを記憶している。ところが、第二問 聖母マリアの被昇天の日は何日か？理屈っぽいことは得意であるのに、幼稚園児でも知っているこんな簡単な問題となるとお手上げ。不意をつかれた感じ。さて、そばの机を見ると「公

教要理」が置いてある。悔し紛れにカンニングと決めた。それも、受洗前の罪は、洗礼によって、すべて許される、という都合のよいカトリック要理の教えを思い出した。「マリア様おたすけを！」と願いつつ、滑り込みセーフ。とにかく、学生時代には、プライドもあって、一度もしたことのないカンニングをやったのけた天国泥棒。1948年12月12日（無原罪聖母公式祭日）、大森教会で下山正義師により受洗。

下山師は、わたしの受洗のための試験のことで、皆に、いつも、ヘンな自慢をしておられた。「オレ、あいつの答案に落第点をつけてやった。やたらと長く書きよったからな、アッハッハ...」第一問の「神の存在についての論証」のことだった。カンニングのことなどはどこへやら、まったく頭になかったらしい。ともかく、ちょうど50年前の洗礼という出来事が、やがて、全く予期しない人生の方向を生み出していくことになった。

*参照 ルカ3,7-9

表紙の写真

奥村光也作品「Angle of Silence」



奥村光也（おくむら・みつや）

1951年東京生まれ。武蔵野美術大学卒業後、渡米。サンフランシスコ・アート・インスティテュート大学院写真科卒業。1978年に拠点をニューヨークに移し、コマーシャル・フォトグラファーとして活動を始める。主な個展に「Angle of Silence」「Arches」（いずれもP.G.I.で開催）がある。ニューヨーク在住。

Emmet Gowin

エメット・ゴウウィン 作品展



“Recent Work”

1998年10月15日（木）— 11月20日（金）

エメット・ゴウウィンは、70年代半ば、妻やその家族を神秘的な映像でとらえた作品を発表して以来、現在にいたるまで高い評価を受けているアメリカの写真家です。その後、風景写真に取り組み、さらに単なる風景から地球という大きな対象へと視点を広げていったゴウウィンの作品は、息をのむほどの造形的な美しさをたたえ、人々の心に深く語りかけられます。本展示では、近作のモノクローム作品30余点を展示します。

フォト・ギャラリー・インターナショナル（虎ノ門）
月～金 11:00 am～7:00 pm
土・日・祝日休館 入場無料
東京都港区虎ノ門2-5-18
Tel 03 3501 9123



P.G.I. 芝浦
川田喜久治 作品展 “Car Maniac”

1998年11月11日（水）— 12月19日（土）
月～金 11:00 am～6:00 pm
第2・4土・日・祝日休館 入場無料
東京都港区芝浦4-12-32
Tel 03 3455 7827